

近江の奈良時代

1. はじめに

平城京遷都後の745年、大仏建立を目論んだ聖武天皇が甲賀の紫香楽宮に都を遷し、759年には、孝謙・淳仁両天皇の時代に専権をふるった近江国司藤原仲麻呂が平城京の副都として保良宮の造営を開始します。今回は、大津宮廃都後、再び歴史の表舞台に登場した奈良時代の近江を紹介していきます。

2. 聖武天皇と近江

(1) 東国巡幸

740年、天皇は山城・恭仁京遷都を目論んで東国巡幸を実施します。行幸は、美濃・不破までは壬申の乱の天武天皇の進軍行程と重なり、近江では激戦のあった横川・犬上・野洲・禾津に頓宮を設営し、最後に天智天皇発願の「崇福寺」を礼拝しました。このうち禾津頓宮は、7間×4間、床面積247㎡の南北二面庇の大型掘立柱建物が見つかった大津市膳所城下町遺跡が有力視されています。



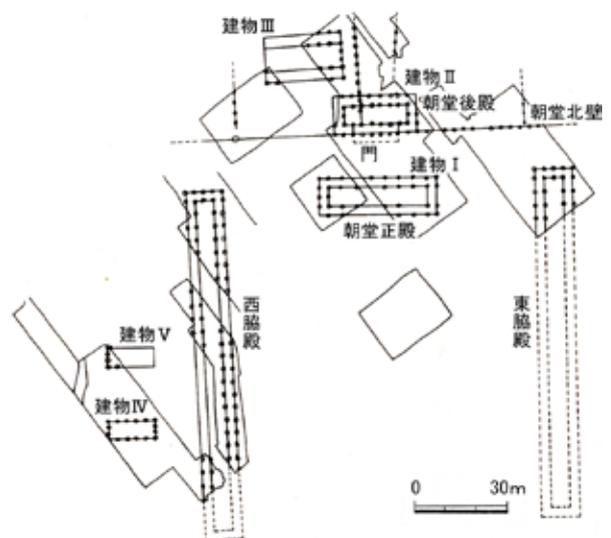
膳所城下町遺跡：掘立柱建物

(2) 紫香楽宮遷都

天皇は742年に紫香楽宮の造営を開始し、745年には河内・難波宮から遷都します。宮造営の目的は、743年に大仏建立の詔を発し、「甲賀寺」の寺地を開いたことから仏都の建設にあったと考えられます。しかし、宮の造営に反対する不穏な出来事が多発し、わずか5ヶ月後で廃都となりました。宮跡は信楽町の宮町遺跡に比定され、甲賀寺跡は黄瀬・牧の寺院遺構ではないかとされています。

紫香楽宮

四面庇の前殿・後殿とその左右に22間・91.5m以上の長大な脇殿が配置された「朝堂」が見つかっています。この中枢部の北側には、溝で区画された多数の大型建物や倉庫などが見つかっており、宮が官衙域を整えた大規模なものであったことがわかります。



宮町遺跡：中心区画平面図

しんくわうじんじや
新宮神社遺跡

宮町遺跡と「甲賀寺」の中間にある新宮神社遺跡では、朝堂に向かう「朱雀道」と考えられる幅7mの道路跡と、それに伴う橋脚が見つかりました。このことは、宮の造営にしっかりした都市計画のあったことを示します。道の東側には掘立柱建物3棟と井戸があり、道や橋を管理する施設と考えられています。

きたきのせ
北黄瀬遺跡

宮の南西1.5kmにある北黄瀬遺跡では、2×3間の建物で覆われた一辺2mもの巨大な井戸が見つっています。平城京の造酒司や大膳職などに匹敵するもので、紫香楽宮の範囲が広大なものであることがわかりました。



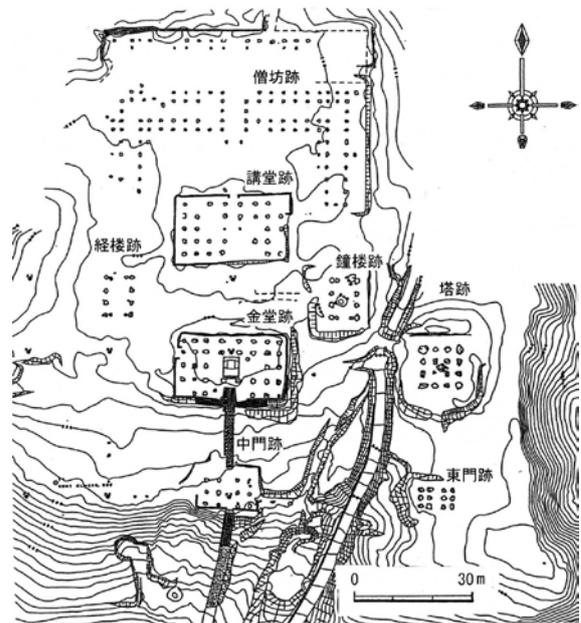
北黄瀬遺跡：発掘された井戸

(3) 大仏の建立と近江国分寺

743年、天皇は「甲賀寺」で大仏の建立を開始します。しかし、宮が廃都となったため中断し、改めて、奈良の東大寺で再開されます。また、741年に全国に国分寺・国分尼寺の建立を命じました。近江では、「甲賀宮国分寺」の記事が見られることから、「甲賀寺」が廃都後に近江国分寺になったと考えられています。国分寺は、785年に焼失したため、820年に大津市光が丘の石山国分遺跡の一角に所在したとされる「定額国昌寺」を国分寺にしたと記録されています。

甲賀寺跡

宮町遺跡から南約2kmの丘陵上で、中門、金堂、講堂、三面僧坊、小子坊を一直線に配し、その東に塔院と食堂を置く東大寺に似た寺院遺構が見つかり、「甲賀寺」の跡と考えられています。しかし、大仏殿に当たる金堂の大きさが、大仏を納めるには小さすぎるため、宮が平城京に戻ってから整備された近江国分寺だと考えることもできます。



甲賀寺跡：伽藍配置図

かじやしき
鍛冶屋敷遺跡

甲賀寺跡の東北部で、銅を溶かす溶解炉、溶解炉の温度を高める鞆、製品を鑄込む鑄込み場が一つのセット（工房）になって、13セット以上が南北に規則正しく配置された鑄造遺構が見つかりました。また、これらの工房を整地して梵鐘や仏像の台座などの大型品を鑄込んだ鑄造遺構も見つかりました。「甲賀寺」建立に関わるものと考えられ、また、「甲可寺造仏所」で製作された仏像が東大寺へ運ばれたとの記録から、紫香楽で東大寺の仏像や仏具も造っていた可能性も考えられます。



鍛冶屋敷遺跡：銅の鑄造施設

3. 藤原仲麻呂と近江

聖武天皇没後、孝謙天皇、次いで淳仁天皇が即位します。その間、時の民部卿で近江守を兼ねた藤原仲麻呂（恵美押勝）が専権をふるいます。759年には、平城京の副都として、近江で三度目の宮となる保良宮を造営し、天皇を長期行幸させて政務を執らせています。また、近江国の政庁および周辺諸官衙、道路、寺院などの整備を大々的に行いました。

（1）保良宮の造営

保良宮は、南の平城京に対する「北京」域をも伴う大規模なものだったようです。また、伽藍山南東麓に位置する石山寺は、保良宮の鎮護のための寺として、天皇行幸直後に大規模に整備されています。しかし、764年、仲麻呂が孝謙上皇が寵愛した僧道鏡と対立して敗れ、宮の造営は中止されてしまいます。その所在地については、瀬田川西岸の伽藍山西麓の台地のどこかとする意見で大方が一致しています。この付近には、石山国分遺跡があり、宮の他に国分寺、国分尼寺、国昌寺などの所在が推定されています。

石山国分遺跡

東西一町規模の区画を示す築地塀と道、区画内に建つ掘立柱建物、鉄器の生産工房などが見つかっています。宅地を支給した記録が

あり、官人たちの邸宅がある京域の一部である可能性があります。遺跡からは、多数の平城京式の瓦が出土しており、宮中枢の建物は瓦葺きで、礎石建ちであったと思われます。

関津遺跡

幅15mと七官道を凌駕する大規模な道路跡と道路方向に沿って整然と並ぶ様々な規模と構造の掘立柱建物が検出されました。墨書土器、硯、帯金具、木沓などが出土していることから、識字層や官人層の存在が考えられます。道路跡は平城京と近江を結ぶ「田原道」の可能性が高く、国庁などの整備にあわせて施行された「南北大路」、「保良宮」の壮大な都城計画に基づく「朱雀大路」などが考えられています。



関津遺跡：道路跡とそれに伴う建物跡

（2）近江国庁と周辺官衙の整備

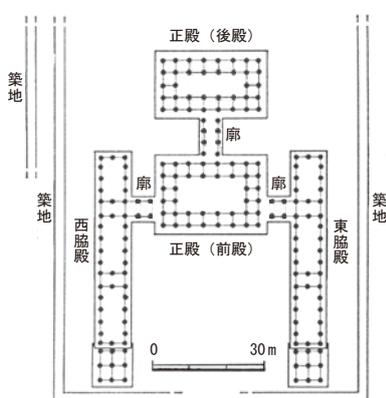
近江は13大国の一つで、鉄や米など豊富な財力を蓄えることができることから、国司の長官である守には藤原姓の著名な政治家たちが名を連ねています。とくに仲麻呂は、天皇に匹敵する権勢を得てもなお国司の座を離さず、諸官衙・寺院の整備を進めたのです。

近江国庁政庁

国庁のうち、国司が政務を執る政庁は、南面に門を持つ築地塀で囲まれ、前殿と後殿を南北に配した正殿とその東西に配された脇

殿から構成されています。いずれも瓦葺基壇の上に建つ壮大な瓦葺き建物です。屋根は飛雲文ひうんもんと呼ぶ特徴的なデザインの瓦で飾られていました。

近江国庁跡：
政庁部平面図



そうやま
惣山遺跡

政庁の南東約 500 m の丘陵上で、北端を政庁中門の位置に合わせて南北一列、約 300 m におよぶ 7 間 × 4 間の 12 棟の瓦葺総柱倉庫群が見つかりました。古代近江の 12 郡と数が一致すること、倉庫同士の間隔がなく塀などの防御施設がないこと、勢多橋から一直線に伸びる官道の正面に位置することなどに遺跡の謎を解く鍵があるかも知れません。



惣山遺跡：倉庫群の柱跡

あおえ
青江遺跡

国庁の推定南門の真南 300 m 程の丘陵上で、幅 24 m に及ぶ道路跡が検出されています。道路の東西両側には築地塀で囲まれたおよそ 1 町四方の二つの区画があり、西区画からは庇付の大型建物が見つかりました。国庁の正面にあって区画北面が勢多橋からの官道に面していること、広大な敷地で、日常食

器類が多数出土していることなどから、国司の館であった可能性があります。



青江遺跡：遺跡全景

どうのうえ
堂ノ上遺跡・中路遺跡

中路遺跡では総柱の礎石建物 2 棟と、その北側で幅 12 m の東西方向に走る道路跡が見つかりました。また、堂ノ上遺跡でも築地塀に囲まれた瓦葺礎石建物群とその南側で道路跡かと思われる溝跡が見つかりました。

国庁を始めこれら諸官衙は、いずれも 8 世紀中頃に整備されたもので、東西官道に沿って並ぶこれら諸官衙の様子から、国府が国庁を中心とした都市計画のもとに整備されていたことがわかります。

4. おわりに

781 年、桓武天皇かんむが即位すると、揺らぎ始めた律令体制の立て直しと、墮落した仏教の立て直しを図ります。そして、都を長岡京ながおかきょう、平安京と遷都していくのです。

平成21年(2009年) 3月

滋賀県埋蔵文化財センター
〒520-2122

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 (077) 548-9681

FAX (077) 548-9682

E-mail shigamaibun-center@guitar.ocn.ne.jp

URL http://www3.ocn.ne.jp/~shiga-mc/